

授業科目名	ダンスワークショップ実習 B	担当教員	児玉 北斗 平原 慎太郎
必修の区分	選択		
単位数	2 単位		
授業の方法	実習		
開講年次	1 年 第 4 クォーター		
講義内容	冬期集中講義として「振付」という角度から、振付／ムーブメントワークショップ、ディスカッション、レクチャー、ライティングなどを通じてダンス作品の創作における方法論、倫理観やコミュニケーション能力、大胆さなどを培う。「振付」という概念を拓げ、現代における振付家の仕事を実践・鑑賞を通して検討することで、ダンスと身体に関する理解を深める。		
到達目標	まず、(1) 振付家に必要とされる実践諸能力を基礎付ける。そしてそれにとどまらず、(2) 振付という実践をラディカルに捉え、世界的なダンスの文脈に対応できる思考能力を言語的に示すことが出来るようになる。特に、(3) 空間・時間・身体・言語の関係性において「振付」という視点を創作活動にとどまらず社会的に適用する思考ができるようになる。また、(4) 振付とダンスの言説を理解することで、振付家を活かした仕事の企画を立案できる力をつける。		
授業計画	<p>本実習は振付家との実践的ワークショップを踏まえた上で、受講者が「振付」という視点からパフォーマンス（旧来的な「ダンス」の枠組みに限らない）の実践を経験するものである。</p> <p>初日のイントロダクションと「振付」という概念を歴史的背景から再考するレクチャーを通して、現代的なダンスの実践への導入とする。振付家とのワークショップを通してタスク／スコア／コンポジション／インプロヴィゼーションといった概念を実践的に理解し、様々なムーブメントの生成方法やダンス作品の創作現場におけるプロセスを体験する。</p> <p>ワークショップ、レクチャー、ディスカッション、授業内発表などを組み合わせ、教員の実践的指導のもとで作業を進める実習となる。主に以下のような要素を参加者の方向性に合わせて構成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 舞踊史や「振付」の方法論に関するレクチャー 2. 身体表現と社会のつながりを考える 3. 現代の振付という実践に求められる倫理観や知識に関するディスカッション 4. ムーブメント・ワークショップ 5. 動きのコンポジションと演出に関する実践 		

	<p>6. 受講者のアイデアを明確化するためのワークショップ</p> <p>7. 授業内発表とフィードバック</p>
事前・事後学習	<p>事前学習として実習開始時までに現代のダンス作品について、特にゲスト講師の作品について調べておくこと。また、事後学習として動画やノートなどを利用してプロセス（制作のスケジュールや体調を含む）を記録し、リフレクションとして整理しておくこと。</p>
テキスト	<p>必要があれば授業内で適宜配布する。</p>
参考文献	<p>木村覚, 2009, 『未来のダンスを開発する』メディア総合研究所</p> <p>児玉北斗・編, 2020, 『ダンスをめぐる12の文章』（ウェブサイト：https://writings.hokutokodama.com/）</p> <p>早稲田大学演劇博物館, 2015, 『Who dance? 振付のアクチュアリティ』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館</p> <p>Burrows, Jonathan. 2010. Choreographer's Handbook. Oxon and New York: Routledge.</p>
成績評価の基準	<p>実習内でのコミットメント（50%）、課題（50%）</p>
履修上の注意履修要件	
実践的教育	<p>芸術文化分野の実務経験を持つ教員が、その実務経験を生かして教授することから、実践的教育に該当する。</p>
備考欄	<p>定員超過の場合、志望理由などを基に選考を行う場合があります。</p> <p>毎日長時間、身体を実際に動かして行う実習です。無理なスケジュールをたてず、十分に休息を取り、体力的に充実した状態で授業に望むことを心がけて下さい。</p> <p>また、身体的接触を伴うことがありますので、受講に伴う懸念点などがあれば必ず担当教員に相談してください。</p>